
告白

木下 葉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

告白

【Nコード】

N7407T

【作者名】

木下 葉子

【あらすじ】

いじめっこを好きになった、いじめられっこのおはなし。2人ともちよつと痛い子。

短いです。おそらく3話くらいで終わります。

1・彼の場合

小二のときは、雨の日だけ毎日放課後には靴が消えていた。

小四のときは、絵をびりびりに破かれ教室のごみ箱に捨てられた。二ヶ月かけて書いた、何かのコンクールに入賞した大事な大事な絵だったんだけど。

中二のときは、女子トイレに一晩閉じ込められた。あつというまに噂は広まり、次の日から学校中の女子に総出で生ゴミのように扱われた。

そしてその後すぐに、噂の首謀者がわかった。

長年の嫌がらせの犯人が、彼女だということも。

「貴女が好きです。僕の傍にいてくれませんか？」

そして高一の今、僕はその子に告白をしている。

彼女のきれいな顔は現在歪んでしまっている。

梅雨の湿気と汗で、いつも麗しい長い黒髪が白い首筋に貼りついてしまっているせいなのか。

それとも、先ほどの言葉のせいなのか。

鈍い僕にはわからない。

赤く理想的な形の唇から、言葉が洩れる。

「わたしは嫌い。」

女子にしては少し低い声。相変わらず綺麗な声だな、とどこか呑気に思った。

同時に、頭を鈍器で殴られたような強い衝撃を受けた。

そうか、やはり、ぼくは、きらわれていたんだな。

気づいては、いた。さすがにそこまで馬鹿じゃない。

昔から誰にでも優しいひとであったのに、僕にだけ何かにつけていやがらせをしていたから。

でも認めたくなかった。

弱い僕は、認めることなんてできなかった。
今だって顔をあげることすらできずに、ただ泣かないように唇をかみしめている。

でももう終わりにしなければ。
僕にこれ以上、彼女を不快にさせる権利なんてない。

「……ああ、やっぱり」 彼女は続ける。

僕は反射的に顔をあげた。

彼女は笑っていた。

しかも、いつもの計算されつくした貼りついた笑みではなく、かえって疑ってしまうほど無邪気に。

「わたし、あなたの傷ついた顔が好きよ。
すごくすごくきれいだと思うわ。」

ねえ、わたしのこともっと好きになつて？
世界で一番好きなひとに傷つけられたら、あなた、どんな顔を見せられるのかしら。

わたし、あなたが大嫌いよ」

驚いた。ここ数日間ずっと耳についていた不快な雨の音でさえも、心地よく感じる。

目の前のひとの表情と、場の空気が合ってなさすぎる。
今の言葉を、本当にこのひとが言ったのか？

もしそうだとしたら、……狂ってる。

「今の顔もすごくいい。でもまだ足りないわ。

もしあなたが世界中から見放されて誰も信じられなくなって、わたししか継る相手がいなくなったら、わたし、間違いなくあなたを拒絶する。

なにもかもに絶望して、涙も声も枯れ果てて、死にたくて仕方がないときの表情がたまらなく見たいから。

想像するだけでぞくぞくするわ。ああ、でも、本物はもっと素晴らしいんじゃないかな。

その顔を見るまでなら、そばにいてあげてもいいけど……。
どうする？」

このひとは今、ただ僕を不幸せにするためだけに、そばにいてと言った。

彼女を好きでいる限り、ぼくはきつと幸せになんかなれない。きつと、ずっとずっと、存在さえもこの狂ったひとに否定され続けるんだろう。

ああでも、傘を差しのべてくれたのも、絵のモデルになってくれたのも、僕を人間扱いしてくれたのも、彼女だけだったんだ。

彼女が笑うなら、それもいいかもしれないと思ってしまった僕は、もっと狂ってる。

2・彼女の場合

断らないなんて、思ってもいなかったの。

朝、いつも通りに学校に来た。

いつも通りに自分の下駄箱を開け、いつも通りに上履きの上に重なった手紙を確認する。

今朝は3通。いつもより少ない。

都合のいいことに今まわりには誰もいない。

教室に行つてから手紙の中身を確認して、周囲から好奇の目を向けられるのにはそろそろ疲れたし、たまにはその場で開けてもいいだろう、と思つた。

最初のころは休み時間にこっそり見たり、放課後に誰も見ていないことを確認してから開けていた。

しかしなにぶん数が多すぎて、人がいないときに処理をしていたのでは終わらないことがよくあつたし、放課後にゆっくり処理していたら、「今日の昼休みに〇〇で待ってます」なんてのも結構あつたため、最近ではもう開き直つて教室で堂々と見ていたのだ。

一通は、可愛い動物がプリントされた便せん。女子の好みそうなデザインを選び、実際に使っているこの微妙な気遣いが妙に私をイライラさせた。

一通は、ルーズリーフをただ四つ折りにしたもの。筆圧が強いせいで、開く前からすでに中身がみえてしまっている。この気遣いになさすぎるものはもっとイライラする。

もうこのイライラに免じて読まなくてもいいか、とも思つたが、後々面倒なことになるのはいやだったので我慢して目を通した。よかった。急を要する系じゃない。

最後の一通は、無地のシンプルな白い便せん。唯一私好みのものだった。

自分ながら慣れたものだ、なんて思いながらカサカサと手紙を開

く。

一文字目が目に入った瞬間、心臓が止まるかと思った。

忘れもしない、この文字、筆圧、文章構成のクセ。

十年以上も前から、私の心をつかんで離さない人のもの。

手紙のとおり、彼は教室に残っていた。

彼と私は同じクラス。小1の時からずっと。

高校までも同じ、というのは驚かれるかもしれないが、私たちの通っているのは結構なお金持ちしか入学を許可されない由緒ある名門校。しかも幼稚園から大学まであるもんだから周りは見知った顔ばかり。

だからといって、結構クラス数もあるしずっと同じになるのは確かに珍しいものだったが、別に特別運命を感じるほどではない。

教室に人が一切いなくなり、30分ほどたったころだろうか。

彼はいきなり立ち上がり、私の席までやってきた。

彼が私の近くにいます。それだけで顔のゆるみが止まらない。でも駄目。ここでにやけちゃったら、長年の計画が台無し。

地味だけどそこそこ整った顔立ちの中に、強い決意のようなものを感じられた。

今まで見たことのない彼の迫力に負け、私もゆっくりと立ち上がる。

視線が近くなったせいか、先ほどの迫力はどこへやら、うつむいてしまった。

そして、なぜか悲しそうに口を開く。

「貴女が好きです。僕の傍にいてくれませんか？」

それは、ずっとずっと欲しかった言葉。

彼以外の雑魚からなんて数え切れないくらい言われたけれど、いま目の前にいるこの人から確かに言われたかった。

でも返事は決まっていた。

私が彼の気持ちに気づいた時から。

「私は嫌い」

必死に気丈さを取り繕っていた彼の顔が一気にゆがむ。

ああ、そんな表情ですら愛おしい。

でもお願い。私のことを嫌いになつて。

「……ああ、やっぱり」 私は続ける。

その声に反応し、彼が顔をあげる。

私の一挙一動に彼がいちいち反応する姿が嬉しい。

でもこんな姿を見るのも最後。

そう思うと同時にすごく寂しい。

そして私は口にするのだ。

この人を傷つけるための言葉を。

「わたし、あなたの傷ついた顔が好きよ。」

すごくすごくきれいだと思うわ。

ねえ、わたしのこともっと好きになつて？

世界で一番好きなひとに傷つけられたら、あなた、どんな顔をみせてくれるのかしら。

わたし、あなたが大嫌いよ」

彼は何を言われたのかわからない、という顔でこちらを見ている。
こんなアホづらですら愛おしく思ってしまうのだから、私もたいがい重傷だ。

でもこれでわかったでしょ？

私は変態なの。

あなたの傷ついた顔がただ好きなの。

他の人間なんかに見せたくないの。

他の人間なんか見てほしくないの。

束縛したくてたまらないの。

「今の顔もすごくいい。でもまだ足りないわ。

もしあなたが世界中から見放されて誰も信じられなくなって、わたししか継る相手がいなくなったら、わたし、間違いなくあなたを拒絶する。

なにもかもに絶望して、涙も声も枯れ果てて、死にたくて仕方がないときの表情がたまらなく見たいから。

想像するだけでぞくぞくするわ。ああ、でも、本物はもっと素晴らしいんじゃないかな。

その顔を見るまでなら、そばにいてあげてもいいけど……。
どうする？」

早く引いて。

私の言葉に。

私の存在に。

早く逃げて。

私の手の届かないところに。

あなたみたいな普通の人が、私みたいな変態に捕まる必要なんてないの。

幸せになってよ。私のいないところで。

泣きそうだな。これが彼に向ける最後の言葉だと思ったら。

でも笑わなくちゃ。こんなひどいことを笑顔で言えるひどい女だと思われなくちゃいけないから。

私はこれまでに人に見せたことのないような、とびっきりの笑顔を披露した。

それとは対照的に、目の前で肩をふるふると震わせる人。

どうするのかしら。彼も今にも泣きそうなんだけど。

まあ彼の性格から考えたら、無言で走り去るってところかしら。

一応どんな罵声も浴びる心構えはしてきたつもりだけど。結構、いやかなり苛めた覚えもあるし。

彼はとうとう半泣きになり、顔をいつそつくしゃくしゃに歪ませた。

そして、なぜかゆっくりとうなずいた。

こんな狂った女に惚れた狂った男に、私はもう一度恋をした。

2・彼女の場合（後書き）

彼がただのドMみたいになってしまいました…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7407t/>

告白

2011年10月9日03時33分発行